

「本を読む」
木村敏著『臨床哲学の知』（洋泉社）
関係発達臨床からみた「あいだ」論

小林隆児

編集者の佐藤幹夫氏より木村敏著『臨床哲学の知—臨床としての精神病理学のため—』の書評を依頼された。わが国を代表する精神科医として独自の現象学的人間学を構築し、臨床精神病理学の領域において揺るぎない地位を占めている氏の最新の語り下ろしの書を批評するなど、もとより浅学非才の評者には、はなはだ荷の重い仕事である。ただ、氏の主張する統合失調症における「自己個別化の原理の危機」としての『自明性の喪失』について、以前評者は汎汎性発達障碍の治療を通して発達論的に論じ（小林、二〇〇三）、それが契機となつて氏と対談をするという貴重な体験を持つことができたこと（十一・小林・木村、二〇〇四）、さらには評者が関係発達臨床という立場から「関係性」

を通して臨床の事象を捉えることの重要性を一貫して主張してきたこと（小林、二〇〇八）などを考えてみると、氏とこのような形で誌上で対話できるのは貴重な機会だと思ひ、勇気を奮つてお引受けした次第である。そこでこの機会に「あいだ」論を関係発達臨床の視点から捉え直したらどうなるか、その一端を考えてみよう。

本書は、聞き手である演劇畑の今野哲男氏が幾度となく氏とのインタビューを繰り返して掘り起こす作業を通して氏の主張を再構成したものである。そのことが本書をとても読みやすくしてくれている。評者は本書によって氏に対してこれまで抱いていた哲学者独特の近寄りたさが随分と払拭されるとともに、氏の人となりを感じさせる語りも随所に盛り込まれていて、とても親しみの持てる内容になっている。それを可能にした聞き手の労にまずは感謝したいと思う。氏がこれまで論じてきた膨大な著作のセンスが本書では聴き手との「あいだ」を通してよりこなれたかたちで再現されている。

氏の著作では、必ず二つの対立項が提示され、その両者の「あいだ（関係性）」を論じることが、まさに氏のいう「共通感覚」である。ここで重要なことは、乳児が自ら体験（体感）していることを適切に意味づけ認識することができるといふことである。氏はこれを「養育者をはじめとして関わる大人の存在である」ということである。氏のことを借りれば、「こと」としての体験を「もの」としてゆく過程である。

おながががしている乳児のアクチナルな体験そのものを養育者がアクチナルに感じ取って対応することができれば、乳児の体験は養育者との「あいだ」でゆるぎない自己認識過程となつていくのであろうが、ことはさほど容易ではない。おそらくはさまざまに次元での取り違い、読み違い、すれ違いに出くわすのが日常の生活体験である。そのことが誕生後、日常的にあまりにも頻繁に起れば、それは乳児の反省的自己の生成（自己認識）に重大な齟齬をきたすことは容易に想像できる。そこにこそ「自己の個別化の原理の危機」を見て取ることができないのではないかと評者には思われるのである。

氏が長年の精神科臨床においてもっとも大切にしてきたのが、患者に見られる症状に着

いう思索の方法が一貫してとられている。具体的には、「もの」と「こと」、「体言」と「用言」、「実体」と「作用」、「主語的な自己」と「述語的な自己」、「アポロン」と「ディオニューソス」、「理性的日常」と「非日常、反日常」、「ノエシス」と「メタノエシス」、「ヒオスの生命」と「ゾーエーの生命」、「小文字の生」と「大文字の（生）」、「小文字の死」と「大文字の（死）」など、これまで氏が取り上げてきたテーマの大半が語られている。そして、このような対立項の思索の原点となつているのが、「リアリティ」と「アクチナリティ」の関係である。

ただここで忘れてはならないのが、対立する二項がまずあって両者の「あいだ」が生まれ、そのことを論じることが「あいだ」論ではないということである。まずは「あいだ」があつて、その結果として二項が生まれるのだという。その端的な例が「自己」と「他者」の生成過程である。

「あいだ」がなければ「自己」も「他者」もありえない。このことは発達論的にみただけに、極めて重要なことを示唆している。評者の関係発達臨床に引き寄せてみると、乳児あるいは幼児早期の子どもたちを育てる養育目するのではなく、症状を背後から生み出している精神の病理、自己存在の病理に強い関心をもつという姿勢であったという。評者は氏のこうした臨床態度にいたく共感を覚える。なぜなら評者も常々子どもたちが示す症状、障碍、行動の異常などの背後に動いているもの、つまりはそこでの主体の気持ちの動きに着目してきたからである。

昨今、発達障碍が急速に注目されるにつれ、子どもと精神医学の重要性が強調されるようになってきている。そこでは子どもと「こと」の臨床と銘打って臨床教育の計画まで立案されつつあるが、実際の医療現場を眺め回してみると、多くの場合、子どもたちが示している症状や行動異常、障碍像などにのみ着目して、広汎性発達障碍、軽度発達障碍などの「発達障碍」という診断名が濫用されている。

氏が昨今の精神医学の現状を、患者の内面を無視して外面的な症状だけを治療対象とする、寒々としたものになりさがっていること嘆き、将来を危惧しているが、このことは児童精神医学の領域においてもなんら変わらないのが実情である。その意味からも現在氏は氏の強調するように、（児童）精神医学その

